

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

題材へのこだわり

—引き継ぎたいメッセージ・新たなメッセージ

田嶋美砂子 (元星美学園中学校・高等学校)



なぜ題材を重視するのか

NEW CROWN (以下NC)には特筆すべき点が数多く存在するが、その真髄は題材にあるといってもよいのではなかろうか。長きに渡り、画期的なテーマを随所に配置し、中学生の知的好奇心をかき立てようと努めてきたことから、現在ではありがたいも、「題材のNC」と称されるに至っている。

NCはなぜ題材を重視するのであろうか。1つには外国語教育、とりわけ義務教育としての英語教育を単なる言語習得の場とは捉えていない点が挙げられる。確かに、ある言語を学ぶということは、その言語の語彙、表現、文法、語用論的知識、実際の運用能力などを身につける行為を意味する場合が多い。NCも、中学生がこれらを確実に習得し、ことばを学ぶ楽しさを体験することができるよう、注意深く構成されている。しかし、それと同時に、編集に携わっている私たちには、ことばを使う「人間」、ことばが使われる「社会」、ことばと切り離すことのできない「(異)文化」への関心中に中学生に高めてもらいたいという強い願いがある。NCでは、この願いが題材へのこだわりにつながり、メッセージ性に富んだ内容となって、表れているのである。

28NCの題材

題材へのこだわりは、28NCでも健在である。ここでは、特に力を込めて紹介したい課について、「人間・社会」と「(異)文化」という観点から述べていく。

(1)「人間・社会」を考える

この観点において、第一に取り上げたいのがBook 1 Lesson 7のSports for Everyoneである。この課では、24NCの車いすバスケットボールに加え、

新たにゴールボールを扱っている。ゴールボールは視覚障がいをもつ人々のための球技で、試合中、鈴入りのボールの音を聞くことがプレーヤーにとって非常に重要であることがUSE Readで述べられている。また、同じくUSE Readにある「Think」のコーナーには、「なぜ「Sports for Everyone」というタイトルがつけられたのか、自分の考えを書いてみよう」という課題も用意されている。この課はスポーツに焦点を当てているが、そこから話題を発展させ、さまざまな人々がともに暮らす社会、言いかえれば、「society for everyone」について考える機会を提供することもできるであろう。

ところで、「共生」は人間同士の事柄に限ったことではない。産業が高度に発達した現代社会に生きる私たちにとって、自然との「共生」、すなわち、自然環境をいかに守っていくかという問題も避けて通ることはできない。Book 2 Lesson 3のThe Ogasawara Islandsでは、小笠原諸島のウミガメを主題とし、島民の島に対する思いや観光客に望むことなどが綴られている。USE Readの直後には、「地球のためにできること」について自分の意見をまとめるというUSE Writeの活動もある。中学生には、この一連の作業を通じ、自然環境にまつわる問題が決して他人事ではないということに気づいてもらえたらと思う。

さらに、「人間・社会」を考えるのに不可欠な題材として、Book 3 Lesson 4のThe Story of SadakoとLesson 6のI Have a Dreamを挙げておきたい。これらは教科書のサイズが変わろうとも、白黒からカラーになろうとも、現場の先生方から愛され続けてきた題材である。奇しくも今年も戦後70年目の年。また、米国でローザ・パークス

が逮捕され、公民権運動の兆しが見え始めた1955年からも、ちょうど60年の時が経つ。しかし、現代においてさえ、平和や人権を万人が十分に享受しているとは言い難い。戦禍のうちに生きる人々、差別や偏見と闘う人々、何かしらの不平等感を拭えない人々も数多く存在する。中学生にとって、佐々木禎子さんの折り鶴やキング牧師のスピーチに込められたメッセージを受けとることが、身の回り、そして世界で起こっている問題に思いを馳せる契機となることを心から願っている。

(2)「(異)文化」を知る

NCをNCたらしめているもう1つの要素として、異文化理解教育に資する題材の豊富さが挙げられる。NCは英語圏だけでなく、それ以外の国や地域も意識的に扱っており、日本に関する記述も多い。中学生が海外の多種多様な伝統や習慣、現代事情などを知ると同時に、身近な日本文化を再確認するよい機会となってほしいと考えているからである。

例えば、28NCのBook 1では、24NC同様、スコットランドのバグパイプや米国の学校生活を紹介する一方で、オーストラリア出身のエマが日本で過ごした1年を振り返る課がある。この課では、エマが記したブログの読解を通じ、日本の豊かな四季を改めて感じることであろう。また、Book 1では、新たに「田山暦」を取り上げている。「田山暦」は江戸時代の絵巻で、文字を読む習慣のない人々でも理解することができるよう、絵や記号などが巧みに用いられている。それぞれの絵や記号が何を表しているのかを想像することで、当時の人々の知恵と創意工夫について学ぶことができるのではなかろうか。

Book 3 Lesson 2のFrance — Then and Nowも、「(異)文化」に関する新規の題材として、忘れてはならない。この課の主題は日本とフランスの文化交流である。フランスでは、20年程前から日本のマンガやアニメーションが流行しており、現地の若者が1999年に始めた「ジャパンエキスポ」は現在、日本の伝統文化やポップカルチャーを紹介する欧州最大のイベントになっているという(JAPAN EXPO, 2015)。ここで興味深いのは、フランスにおける日本文化への関心が現代的な現象ではないということである。USE Readに記されているように、

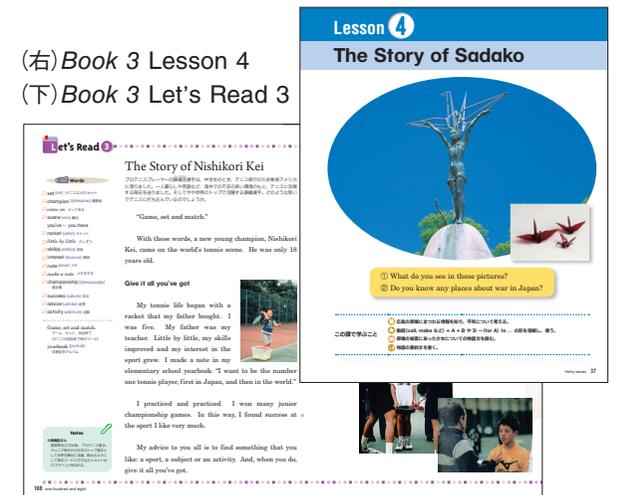
19世紀半ばには既に浮世絵がクロード・モネを代表とする画家たちの作風に多大な影響をもたらしていた。この課の副題を「Then and Now」とした所以である。一方、USE Readの最後に「Maybe you know where to find examples of French culture in Japan.」と書かれてあることからわかるように、日本で暮らす私たちもフランス文化の恩恵を受けている。この課を通じ、文化の流動は一方通行ではなく、相互的に生起する機会が多いということを中学生が少しでも感じてくれたら、幸いである。

おわりに

上述したものの以外にも、紹介したい題材は山ほどあるが、最後にBook 3 Let's Read 3のThe Story of Nishikori Keiで取り上げている錦織圭選手に言及して、結びとしたい。この読み物教材の中では、錦織選手がテニス修行のために13歳で単身米国に渡ったときのことが、次のように語られている。「I was never afraid of making mistakes in English. I learned from the mistakes I made. This positive attitude paid off. If you have something to say, keep trying. Then your message will get across. ... Make your dreams come true!」

28NCとともに成長した中学生は、卒業を控えた時期に読むはずのこのことばをどのように受けとめるのであろうか。今からその反応が楽しみである。

(右)Book 3 Lesson 4
(下)Book 3 Let's Read 3



【参考文献】
JAPAN EXPO (<http://nihongo.japan-expo.com/>) (2015年1月25日閲覧)

NEGIISHI MASASHI
TAKAGI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
HIMAWARI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MITSUKO